

# みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 明日の文化創造

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩城, 晴貞 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00002192">https://doi.org/10.15021/00002192</a>

## 結 語

### 明日の文化創造

岩城 晴貞

21世紀にかかる現在、日本では一般に博物館と呼ばれる施設が優に6,000館を越え、一見盛況ぶりを呈しています。しかし一方では、企業博物館の休館・閉館の声も出始め、自治体の博物館ですら公然と閉館を前提とした議論がなされているのもまた事実です。計画途上の博物館においても、次年度送りや凍結といった事態もめずらしいことではなくなってきました。それらに共通することは、「入場者数の激減」「維持費、運営費がかかりすぎる」といった問題です。また博物館計画策定のためのコンペティション、プロポーザルに与えられる第一の課題も、「集客性」「経費のかからないこと」などが重要な課題として挙げられています。言葉が過ぎるかもしれませんが、どのような博物館をつくろうとしているのかの議論の前に、内容はともあれ“お金がかからず、かつお客が来る博物館を計画してしてください”ということなのです。

博物館には素晴らしい文化資産、人材、情報のストックがあり、そしてそれを広く市民に利用・活用してもらう使命があります。その意味においては、集客のための工夫を十分に検討することは重要なことです。しかしながらややもすると目的意識が逆転し、本来の博物館の存在の意味を問うことなく、まず最初に集客、事業性ありきからの出発といった最近の傾向には釈然としないものがあります。現実はこの主客転倒を平然と口にする行政官も多くいます。こういった状況下での約6,000館の博物館の将来は、誠に危ういといわねばなりません。

博物館の存在意義は、過去の文化資産と現在の情報をからませてイメージーションを豊かにし、明日への文化創造を育むところにあると考えます。博物館の理念や主体性をしっかり持ち、館の性格づけが明確であるならば、施設のありかた、展示方針、運営方針等が必然的に決まり、大きく利用者の期待を裏切ることはないと考えます。表層的・現象的なことにふりまわされる以前に、このことをしっかり検討することがこれからの博物館を考える上で最も重要な視点と考えます。

また、近年のIT革命によるインターネット、デジタルアーカイブ、バーチャル等々の技術革新は展示コミュニケーションの可能性を大きく拓こうとしています。そして、情報化が進展すればするほど「実物＝資料」が持つ豊かな情報もまた相対的に見直され始めています。博物館展示における「モノと情報化」の関係はまさに今日のテーマとすることができます。新しいパラダイムの構築に向けて本格的に動き出したところではあります。

一方、子どもと博物館のコミュニケーションにおいても岐路に立っていると言うことができます。やさしければいい、楽しければいい、ハンズ・オンが全てであるかのような子どものための展示の風潮に多少疑問を感じています。結果としてアメリカのボストン・チルドレンズ・ミュージアムまがいのものが、全国に流布することになるだけのことです。子どもたちが住む身近な地域の特色はどこへ行ってしまったのでしょうか。地域という「場」で子どもと「モノ」が毅然たる態度で対峙し、「モノ」をじっくり観察する力を養うことが、とても大事な気がします。ひょっとすると、極端に言えば大人用の博物館でも十分ではないかと――。私が子どもの頃、奈良国立博物館で感じた不気味な阿修羅像は、高校生そして大人へと歳を経るごとに印象や理解の仕方が大きく変わっていきました。その素朴な印象の変容が私にとってはとても大切なもののような気がします。

レイチェル・カーソンの著書『センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目をみはる感性』に、素晴らしい言葉があります。「わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭を悩ませている親にとっても、“知る”ことは“感じる”ことの半分も重要ではないと固く信じています。さまざまな情緒ゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。」

子どもにとって博物館とは――？夏休み、蝶々の採集に没頭し、名前や雌雄の区別やその他関連事項を調べる際、子ども用の図書や子ども用の博物館に世話になった記憶はありません。変に子どものためという親切ごころは、相当吟味しないと、本質論から離れた、とんでもないことになるかもしれません。

国立民族学博物館と株式会社文化総合研究所との本共同研究は、それぞれの経験、実施例、考え方等を通して、それぞれの立場からレポートしていただきました。それらには各自の内なる博物館への熱い思いが語られ、これからの長い道のりに向かう、確かな気合いを感じます。この博物館に対する熱い想いを次代の博物館づくりへとしっかりバトンタッチしていかなければならないと痛切に感じます。これまで国立民族学博物館が果たしてきた意味は大きいものでありました。国立民族学博物館の21世紀へ向けた先導者としての責任、そしてさらなる飛躍を期待しつつ、本共同研究がその一助ともなれば、幸いかと思います。

国立民族学博物館の設計段階から永年にわたり携わらせていただき、悪戦苦闘の中でたたきあげられ、そしてまた国立民族学博物館と共に研究ができたことは、至上の喜びです。ここに改めて感謝の意を表したく思います。

